

今号のカバーイラストについて

今号は、CiRAが掲げる目標の3つ目、「iPS細胞を利用した新たな生命科学と医療の開拓」をテーマにしています。iPS細胞を作る方法は分かっていますが、どのような仕組みで作られるのか、詳細は未だに分かっていません。右側中央のハテナマークは「そもそも」、「なぜ」を追究する基礎研究のハテナマークです。左側では、ヒトと他の動物たちや老化による細胞の違いを調べることで、生命現象の謎に迫る研究を示しています。

発行・編集

京都大学iPS細胞研究所(CiRA)国際広報室
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
Tel: (075) 366-7005
Fax: (075) 366-7034
Email: ips-contact@cira.kyoto-u.ac.jp
Web: www.cira.kyoto-u.ac.jp

イラスト

CiRA国際広報室 大内田美沙紀

協力

CiRA上廣倫理研究部門
CiRA基金室
公益財団法人 京都大学iPS細胞研究財団

写真

CiRA国際広報室

企画・編集・制作・印刷

株式会社 編集デザイン エル

本誌の記事・写真・イラストの転載を禁じます。
Printed in Japan

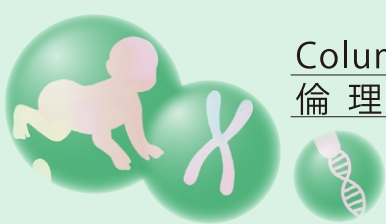


特集

設立10周年
CiRAの来た道、目指す道
Part3 ~生命科学の未来を拓く~

2020年10月号

Vol. 43



さらとモード



三成 寿作 准教授

哲学者の鷲田清一先生の本を読むと、言葉に潜む力や価値に気づかされます。『ことばの顔』（中央公論新社）の「モードの論理」では、「さら」という言葉が扱われています。新しさを意味する「さら」は、「さらの服」のように取り替えられるものや買い換えられるものにはしか使えないそうです。そして、「さら」の持つ「仕切り直し」、「新しいものへの追及」の意味合いから、話題は「モード（流行）の社会」に移行します。この社会は、工業製品や食料品などだけでなく思想までも新しさを追い求め、流行り廃りの風を受け得るそうです。

学術の領域に目を向けると、「さらの研究」とは呼び難い気がします。どのような研究も過去の発見や経験を基に成り立ち、過去を断絶してまっさらに行われるわけではないからです。しかし、モードについては影響を受けるように思われます。生命科学では、遺伝子組換え技術やゲノム編集技術のように、突然、新しい技術が顕在化し新たなモードを作り得ます。一方、生命倫理の研究もまた、このような技術の登場による、伝統的な見方や価値観の動揺に応じた波を受ける傾向があります。

学術領域におけるモードは、たしかに必然的な事象なのかもしれませんが、生命倫理において普遍的な価値観、将来に継承すべき生命観や身体観、社会観を検討していくためには、モード型のみならず、脱モード型の研究を目指す必要があります。モード型と脱モード型のバランスを取りつつ生命倫理の研究の発展に寄与していきたいと考えています。

（文・上廣倫理研究部門 三成 寿作）